

「ひめゆりの沖縄戦」を読んで

1年3組 丸山 健太

「生きる」

この本を読んでいると、何回も出てきた言葉です。今の僕と同じ歳くらいの、女学校の人たちが、お互いを励ますために、または、苦境に立たされた自分自身に、言い聞かせるように言っていました。それは、今の戦争のない日本に育っている僕が、日常、あまり使わない言葉です。だから、なおさらその言葉の重みを感じます。

先生になるために、師範学校で一生懸命に勉強していて、もうすぐ卒業式を控えていたときに、学徒看護婦として、戦争に関わることになった生徒達。そして、爆撃で負傷したり、死んでゆく生徒。今の僕たちの学校生活の中では、とても考えられない光景です。しかも、卒業式は戦場で行われました。本来なら卒業式というのは、新しい門出の日になるはずなのに、その卒業式の最中にも爆撃を受けて、卒業生を送るための歌も最後まで歌えませんでした。僕は、戦争はすべての国民が犠牲になるもので、絶対にしてはいけないと思いました。

今、僕は毎日、自分のことだけで精一杯です。そして一日が終わると、「疲れた。」と言っています。しかし、ひめゆり学徒隊の人達は、どんな気持ちで、一日を終えていたのでしょうか。きっと、僕の疲れとは比べることのできないような「疲労」があったに違いありません。みんな「生きたい」という一心で、毎日、爆撃の間をくぐって走っていたのだと思います。生徒達だけでなく、先生もつらかっただろうと思います。日々、生徒が負傷し、死んでゆくを見て、先生達も戦争を恨んだに違いありません。200人もの生徒を守るのに必死だったと思います。壕をたらい回しにされた時も、先生は、生徒達を必死に励ましていたのだらうと思います。生徒達の命を守るためにがんばっていたのでしょう。だから、自分が死ぬ直前まで生徒のことを心配して声をかけていたのでしょう。

この本を読みながら、すごいなあ。と思ったことがあります。それは、生徒どうしの絆がとても強いことです。負傷した子を、見捨てないで、何人もが手を貸してあげていました。早く行かないと、自分の命も危ないという時も、負傷した友達を背負ったり、肩を貸してあげたりと、皆で助け合っていました。昔の人達は、とても心が強いと思います。現代では、つまらないことで、いじめに発展することがあります。お互いに助け合おうという気持ちが、学徒隊の人達の半分もないからだだと思います。助け合うことで生まれる、友情や、感謝の気持ちを、もっと大切にしていかなければならないと思いました。友人や、家族、学校の先生など、自分が今こうしていただけることの感謝の気持ちを、改めて考えさせられました。

読み進んでいくと、次第に、「自決」という文字が多く出てくるようになりました。始めの方に出てきた、「生きる」という言葉の反対の言葉です。このひめゆり学徒隊の中でも何

人かは集団自決しました。どうして自決しなければならないのか、僕には分かりません。しかし、多くの日本人が自決しました。生きて、敵につかまるよりは、国のために命をかけた方がよいとされてきたからです。そんな中で、自決しようとした生徒に、「死ぬな、生きろ。」という先生もいました。僕は、その先生は間違っていなかったと思います。なぜなら、生き残った人々には、戦場で死んでいった人の分も生きる、という使命が与えられていると思います。そして、その人が戦場でどのような活躍をして、どのように国のために働いたのかを、家族や、後の人々に伝えていかなければいけないと思います。また、僕達も、伝え聞いたことを、自分の子や孫の代までも、次々と伝えていかなければならないと思います。

僕は、今年の 8 月 15 日の正午には、黙祷をしようと思います。そして、志半ばで死んでいった学徒隊や、国のために戦死した人々のことをもう一度思い出して、感謝したいと思います。